

茨城県立古河中等教育学校 一年

## みんなと違う

七五三掛 愛莉

「みんなと違う」

この言葉は、私にとっては褒め言葉でした。

私は、一歳から五歳までの間、父の仕事の為にアメリカに住んでいました。現地での幼稚園、学校では、みんなと違う表現ができること、自分しか持っていないもの、どこにも売っていないものが尊いものだと、友人や先生との関わりの中で感じていました。

でも、帰国して同じ年の子からかけられた「みんなと違う」という言葉が、褒め言葉ではないような気がしました。一緒に遊びたい、仲間に入れて欲しい、そう思った私は、みんなと違わないように、みんなと同じもので遊んで、みんなと同じ絵を描き、みんなが好きなものを好きになれる

ように、頑張っていました。帰国生であることも、隠してきました。

心のどこかで寂しさを感じながら、私はたびたび Year Bookと呼ばれる、アメリカの学校の写真アルバムを眺めました。そこには、さまざまな目の色、肌の色のクラスメイトが写っていました。目の色は、青・緑・茶・黒……、肌の色は白・黒・黄色……。私は黄色です。

現地の公園で遊んでいる時に、そこにいた子どもに、「She is yellow.」と言われた時、私は黄色人種なのだとわかりました。一人一人の顔が違うように、目や肌の色が違うことは特別なこととは思われず、みんな、私と一緒に遊んでくれました。

Show and Tell という発表の時間には、日本の箸の使い

方や折り紙の折り方を説明しました。友達はとても珍しがって、自分たちとちよつと違う文化を楽しんでくれました。家庭料理の紹介では、Miso Soup のレシピを友達のお母さんたちがとても喜んでくれました。英語がよく分からない私に、先生は音楽や踊りで語りかけてくれたこともありました。友達は、絵で気持ちを伝えてくれました。

異国の文化や価値観の違い、その人にしかないキャラクターを、みんなが認めてくれていたのだと、大きくなるにつれ、理解できるようになってきました。

国際化・グローバル化という言葉を最近よく聞きます。世界に通じる語学力は、とても大切だと思います。これからも一生懸命勉強します。

でもその前に、今の私にでもできることは、自分と違う考えを持つ人を理解し、様々な国の文化や、世界の広さを知ることなのではないかと思います。外国の人、自分とは違う環境で暮らす人、価値観が違う人、体の不自由な人、私のような帰国生。そういう人を認めて、理解すること、差別をしないことが、グローバル化への第一歩ではないで

しょうか。

もちろん、集団生活や社会でのルールを守ることは大前提です。その上で、みんなと違うことも認められる。そんな人間になりたいです。

私は一学年二十一人の小さな小学校で六年間学びました。今通っている中等教育学校は、一学年百二十人です。もしかしたら、私にとってはアメリカから帰国した時と同じくらいの環境の変化かも知れません。出身小学校も、住んでいる地域も、好きな音楽や趣味も違うクラスメイトたち。たくさんの人との新しい出会いに、時々とまどうこともあります。でも、新しい世界を教えてくれる友人や、私を認めてくれる心優しい友人との触れ合いに、幸せを感じています。自分が帰国生であることも、自然に話せるようになってきました。

「みんなと違う」ことが、世界の広さや多様性に触られるチャンスだと考えられるような、温かい、グローバルな社会、そして、「みんなと違って素敵だね。」と言える社会が未来に待っていたら、私は本当に嬉しいです。